



牧野博士が横倉山で発見命名した トサノミツバツツジ

Rhododendron dilatatum var. *decandrum* Makino

横倉山をタイプとする植物〔タイプ植物〕は、全部で28種類あるが、そのうち25種類が牧野富太郎博士によるものである。その中の一つに「トサノミツバツツジ」がある。

トサノミツバツツジは、枝先に3枚の葉が輪生する“ミツバツツジ”の変種の一つで、ミツバツツジもトサノミツバツツジも、共に春に花は葉に先立って開き、花冠は赤紫色で、漏斗形をし5中裂するが、雄しべの数が、前者で5本であるのに対し、後者では8~10本と多い点異なる。本州(奈良県)・四国・九州(大分県・宮崎県北部)に分布し、牧野博士が高知県越知町横倉山で最初に発見し1893年(明治26)に命名発表した。オンツツジとともに土佐の春を彩る花である。



牧野博士がネズミの毛を
三本束ねた筆で描いた詳細なスケッチ
手裏(原画所蔵:高知県立牧野植物園)



もう一つの横倉山の春を彩る花 アケボノツツジ

Rhododendron pentaphyllum var. *shikokianum* Yamazaki

本州の紀伊半島と四国に分布し、日当たりのよい山地に生える。

四国では、赤石山系の西赤石山(愛媛県)、稲叢山(高知県)、篠山(足摺宇和海国立公園)などに群落が見られ、中でも篠山は日本屈指の大群落地として有名である。横倉山では、“カブト嶽”の尾根筋と三角点の北側斜面で小分布が見られる。

牧野富太郎先生の思い出

片岡 重敦

理科大好き・読書大好き少年だった私は、書物を通じて牧野先生のごことは良く知っていましたが、まさか、直接ご指導いただけるようになるなどは夢にも思っていませんでした。すべては土佐文化向上会会長の水野進さん(佐川町)との出会いから始まったのです。

〔土佐文化向上会入会〕

土佐文化向上会は、牧野先生が明治時代に設立された「理学会」の後身の会として昭和22年4月に水野進さんら有志によって設立されたもので、最高顧問に牧野富太郎先生、顧問には植物学では牧野先生直弟子の秋沢明・大倉幸也・和田豊州の各先生、地質学では金沢正起先生、その他各界の権威者を多数お願いし、有為の中・高生を会員に研究活動をしている団体です。

昭和28年4月初め、中学校入学前の春休みのある日、水野進さんが見えられ、土佐文化向上会への入会を勧められました。私の昭和27年度高知県児童生徒文化賞受賞の新聞記事を見て来られたようでした。私の研究分野は天文学で、植物学は門外漢だが、との疑問に、牧野先生が最高顧問ではあるが植物学だけでなく会員各自の自由な研究を奨励し、もって郷土の文化向上に努める、との説明をいただいて、会員の末席に加えていただくことになりました。

会の行事として植物採集会が度々催されました。私も、牧野先生の弟子の末席に名を連ねたからには、植物を全然知らないのは恥だと思って、採集

会には極力参加しました。お陰で大倉幸也先生とは特に懇意になり、後に湯川秀樹博士が講演に来高された時、丁度県教委で指導主事をしておられた大倉先生に無理を言って便宜を願っていただいたことが忘れられません。

入会してすぐ、牧野先生に挨拶の手紙を出したところ、しっかり頑張れとの激励のはがきを頂きました。翌29年秋には、横倉山の様子などをお知らせしたら、また丁寧なお返事を頂きました。「来年はぜひ帰省したい」と書かれていたので期待していましたが、その年の暮れから寝込んでしまわれ、ついに帰省は叶いませんでした。

また、年賀状も毎年自筆で下さり、中学生にまで丁寧に付き合って下さることに感激しました。

〔牧野先生をお見舞い訪問〕

昭和31年4月1日、会員4人が水野さんに連れられ、土佐の植物をお土産に牧野先生をお見舞いしました。一行は、佐川高校1年の私、土佐高校1年の森下考司君(現越知町森下薬局)、佐川中学2年の今西敏夫君(現高知海洋高校教諭)、高知中学2年の竹内醇君(故人)で、東京在住の植田剛生先輩が合流されました。(写真左端が水野さん、後列右が私で、左は取材に来られた高知新聞東京支社の橋井昭六記者〔現高知新聞社会長〕です)

病床の牧野先生は痛々しいお姿でしたが、話される言葉はしっかりしており、頭も冴えていました。佐川町の先生の生家周辺や横倉山の植物を水野さんがひとつずつ説明すると、目をうるませてなつかしそうに聞かれ、特に先生が生家の裏に自ら植えられたツバキの花は手に取って離さず、感慨無量のような様子でした。私達も代わる代わる佐川町や横倉山の様子などをお話すると、昔のことをよく覚えておられ、横倉山の思い出などを話して下さいました。話が植物のことになると、学生に講義をするような口調になり、私達はさすが、と感心したものです。その時お話の中で、「ヨコグラノキ*の花をもう一度見たい。」とおっしゃったので、採集して送ることを約束しましたが、帰高後、天候の都合で採集のチャンスを逸し、お詫びと来



東京の病床の牧野先生を見舞った土佐文化向上会のメンバーたち(昭和31年)



ヨコグラノキ(花) ※牧野博士が横倉山で最初に発見命名したクロウメドキ科の植物で、横倉山タイプ植物の一つ。

年の採集を約束した手紙と共に実の付いた枝を送ったことでした。ところが、翌年1月に先生が亡くなられ、永久に約束を果たすことができなくなったことが、今でも悔まれます。

さて、私達は、水野会長作詞の「牧野富太郎先生を称える歌」を水野さんのハーモニカ伴奏で合唱しました。牧野先生は感激した様子で目をしばたきながら聞いて下さいました。その歌詞は次のとおりです。

- 一、山紫水明平和郷 桜の花のその里に
世紀の学者生まれ出づ その名は牧野富太郎
- 二、研さん八十有余年 収集五十有余万
文化の花に咲き匂う あゝ偉大なる博士かな
- 三、真理に生きる精神は 若人たちの胸深く
永久に光り輝かん あゝ偉大なる科学者よ
- 四、我等は永久に功績を 称えて明日の日本の
栄ある文化築くべし あゝ偉大なる博士かな

この日、4月1日だというのに東京は時ならぬ大雪で、牧野先生に付きっきりで看病されている二女の鶴代さんが、「お父さん、雪ですよ。ご覧になりますか。」と尋ねられると、「見たい。」と言われるので、ベッドから少し起こし、病室の障子を開けて廊下のガラス戸越しに見せて差し上げました。無邪気な子どものような喜びようでしたが、下がる室温に、体に障ることを心配した鶴代さんがなだめて、元の状態に戻したことでした。

鶴代さんのお許しをいただいて、牧野先生の書齋を見学させてもらいました。病室から廊下伝いに行った先の部屋は、天井から下がった電灯の下に座机がひとつ、その回りは壁も天井も見えないくらいにうず高く積まれた書物と標本の山……。高知市五台山の牧野富太郎記念館内に再現されている先生の書齋は、私の記憶では、本物の書齋のごく一部だったような気がします。夜通し原稿を書き続ける先生の体を心配した鶴代さんが「停電

ですよ。」とこっそり切った開閉器はあれかな、などと考えながら見せていただいたことでした。

〔草を褥しよに木の根を枕 花と恋して九十年〕

あまりにも有名なこの句が、実は2回もマイナーチェンジされていることを知ったのは、私が高校3年になったときでした。牧野先生の弟子で土佐文化向上会発足時からの顧問である中山卯月先生が昭和33年4月に佐川高校へ赴任されました。授業の合間のお話の中で、「あの句は若い時の作で、最初は『花と恋して五十年』だったが、70歳を過ぎた頃に『先生、いつまでも五十年ではおかしいから、七十年に変えたらどうですか』と申し上げたら、『そうだね。』とおっしゃって、それから『七十年』と書くようになった。年を経て、90歳を過ぎたときに同じように進言して、それ以来『九十年』になった。自分は五十年、七十年、九十年の3種の揮毫きごうをもらっている。」と言われました。また、「時々『花を恋して九十年』というのを見かけるがあれは間違いで、『花と恋して……』が正しい。」とも教えていただきました。

〔横倉山自然の森博物館と共に〕

牧野先生の薫陶を受けて大志を抱いた紅顔の少年も、今や還暦を過ぎて髪も白く薄くなりました。土佐文化向上会を半世紀以上支えてきた会長の水野さんも、さぞかし不肖の弟子に失望していることと思いますが、そんな気配は微塵かじゆんも見せずに付き合ってください。

今、この博物館にご縁をいただいた私の使命は、牧野先生関係の資料をいささかなりとも充実させることだと思っています。幸い、高橋副館長も土佐文化向上会のOBです。水野会長が不肖の弟子のために、もう一肌脱いで下さることを願うや大であります。

(かたおかしげあつ／横倉山自然の森博物館館長)



石灰岩地に生き続けてきた横倉山の陸産貝類

高橋 厚彦

陸産貝類は一般には、カタツムリやデンデンムシ・マイマイなどとも呼ばれている。カタツムリという名は、カタツブリに基づくもので、かた(渴)すなわち陸上にいるツブリ(巻貝)という意味だとも、カサツブリからきた言葉で、かさ(笠)形のツブリという意味に解釈する人もいる。デンデンムシという名は、殻の中にひっこむとなかなか出てこないことから、名付けられたと考えられている。

しかし、生物学でいう標準和名には、カタツムリやデンデンムシという名はなく、一般にマイマイと呼ばれる。殻が巻いているからマイマイと呼ぶのである。

陸産貝類はイカやタコなどと同じく軟体動物の仲間、その出現は海である。海産貝類→淡水貝類→陸産貝類へと、長い年月を経て進化したものと思われる。呼吸方法も鰓呼吸→皮膚呼吸→肺呼吸へと変遷する。

陸産貝類は極めて移動性が少なく、海産貝類のように海流などによって、幼貝が遠くへ運ばれるようなこともないので、多くの離島や石灰岩地帯などで、隔離作用が強く働き、それぞれの地域に局地的に生息する変異型や希産種、固有種なども多い。

さて、横倉山は年間降雨量も2300～3800ミリと多く、植物相も700～800種と極めて豊富で、さらに石灰岩地も多く見られるため、陸産貝類の生息地として全国的にも名前が知られている。「原色日本貝類図鑑」(吉良哲明、1988)にも、「わが国で有名な産地としては、秩父日原・三河石巻山・美濃赤坂金生山・伊吹山・紀伊白崎・備後帝釈・

長門秋吉台・阿波大龍寺・土佐龍河洞・土佐山・横倉山などがその例である」との記述が見られる。

高知県産の陸産貝類は約150種で、そのうち横倉山には約50種が生息している。横倉山では特に、アワマイマイやシロマイマイ・ヌリツヤヤマキサゴ・フルトンギセル・キセルガイモドキ・ヤマタニシ・ヤマクルマガイ・ベニゴマオカタニシなどが多く見られる。キセルガイの仲間も、フルトンギセルの他に、シマケルギセルやトサシリボソギセル・シンチュウギセル・タビトギセル・アズママルクチコギセルなどの生息が確認されている。しかし、横倉山にのみ生息する固有種は見られない。アズママルクチコギセルは横倉山が模式産地となっている。

■アワマイマイ

日本最大の陸産貝である。この種は、徳島県に加茂谷村水井で発見されて名付けられたもので、殻高：29ミリ、殻径：65.8ミリくらいになるものもある。アワマイマイは生息する環境によって著しい個体差があり、龍河洞産のものは大形で、殻高：33.5ミリ、殻径：57.2ミリになる。徳島県穴喰産の矮小型は殻高：21.5ミリ、殻径：33.8ミリと小形になる。殻は厚くて堅く、やや光沢があり、濃い栗色～暗褐色～黄褐色と変異が多い。この種の平地型の小形のものがコウチマイマイで、高知公園などにも生息している。

■フルトンギセル

横倉山で見られるキセルガイの仲間では、この種が一番大きい。コンボウギセルよりわずかに大きくて、殻高：約32.5ミリ、殻径：約7.5ミリ。殻皮は黄褐色で、やや光沢がある。フルトンギセルはコンボウギセルの変異型で、横倉山から佐川・斗賀野付近・鳥形山・天狗高原などにも産する。徳島県では剣山を中心にコンボウギセルを産するが、これより西方の粗谷ではフルトンギセルとなり、剣山より南方の鈴か峯に至る地域ではアワギセルとなっている。

〈貝殻の主な各部の名称〉





アワマイマイ

ヌリツヤヤマキサゴ

ヤマクルマガイ

フルトンギセル

キセルガイモドキ

イイジマギセル

ナカムラギセル

アズママルクチコギセル

〔原色日本陸産貝類図鑑〕より

■キセルガイモドキ

横倉山ではキセルガイモドキの仲間はこの1種だけが生息している。形がキセルガイの仲間に見えるのでこの名がある。キセルガイの仲間は右巻きであり、殻口の内部に、ひだや閉弁のないこともキセルガイの仲間と著しく異なる。殻高：25～29ミリ、殻径：6.5～8.5ミリ。黄褐色で、殻表には顕著な網状彫刻がある。

■ヌリツヤヤマキサゴ

殻は小形で円錐形をしている。殻表は橙または黄色で、ニスを塗ったような光沢が強く現れる。石灰質で半円形の蓋をもっている。殻高：約6ミリ、殻径：10～13ミリ。

■アズママルクチコギセル

樹上性の小形の陸産貝で、殻高：約13ミリ、殻径：約3.5ミリ。紡錘形をしている。黄褐色で、縫合下に淡黄色の、やや幅広い帯がある。

■イイジマギセル

龍河洞を中心とする石灰岩地の固有種で、細長い殻形と殻表の縦肋が、この種の特徴である。殻は細長い棍棒状をなし、殻高：約30ミリ、殻径：約5.5ミリ。殻表は縦肋が著しく強い。殻はやや大形で黄褐色。

■ナカムラギセル

土佐山村桑尾付近にのみ生息している固有種で、殻は中形で、細長い棍棒状である。殻高：約23ミリ、殻径：約4.5ミリ。殻表は細長く規則的に線状があり、黄褐色。

以上のように、横倉山には高知県産陸産貝類約150種のうちの3分の1にあたる約50種が生息しているが、固有種は見られない。日本レッドデータブックの記載によると、すでに県内産のイイジマギセルは危急種に、ナカムラギセルは希少種に挙げられている。陸産貝類は移動力がはなはだ弱い生物であるので、横倉山でも、今後、心無い採集者の乱獲が危惧される。

（参考文献）

- ・中山駿馬(1964)：四国カルスト地帯の陸産貝類。県立自然公園天狗高原学術調査報告書、高知県観光課、176p。
- ・東正雄(1982)：原色日本陸産貝類図鑑。保育社。

(たかはしあつひこ／横倉山自然の森博物館副館長)

博物館ニュース

夏休み博物館教室

〔化石・天体教室〕

8月18、19日(講師:横倉山自然の森博物館館長・片岡重教, 学芸員・安井敏夫, 協力:高知化石研究会会員・山崎健児, 参加者数:小人21、大人12)

今回は、天体教室を兼ねて一泊二日の行程で県立自然公園・天狗高原〔四国カルスト〕で行うことにした。

天狗高原は、高知県と愛媛県との県境の標高1100~1400mの稜線部に広がるわが国では珍しい「高位高原カルスト台地」であり、「日本三大カルスト」の一つになっている。

初日は、山荘に到着後夕食までの間、秋の気配の漂う高原(冬はスキー場)を植物を観察しながら散策した。

夕食後全員で翌日のための学習会を行い、その後星空の観察を行う予定だったが、雲の動きが激しく全体での観察は断念した。それでも、時折雲の切れ間に見える無数の星々の中に「天の川」や「夏の大三角」(はくちょう座・こと座・わし座の三つの明るい星を結んだ線)を見ることができた。

翌19日は、道路工事で出て道端に放置された石灰岩中に含まれる古生代の示準化石・フズリナ(紡錘虫)とウミユリの観察・採集を行った。これらの化石は、今から約2億5000万年前の赤道付近に広がっていた「テチス海」(現在の地中海はその名残りで「古地中海」ともいう)と呼ばれる海域に棲んでいた生物群(テチス動物群)で、それらが化石となって形成された石灰岩が長い年月をかけて北上し現在の位置に到達したものである。

四国カルスト内では、この他にテチス動物群である四放サンゴ(ワーゲノフィルム)や石灰岩の堆積する基盤となった海底火山活動の産物である枕状溶岩なども見られる。

フズリナ自体は、米粒大の小さな化石であるが、四国カルストの形成を知る上で重要であることを参加者に理解してもらい、最後に、「カルスト学習館」で四国カルストの自然・動植物について全員で学習した後、現地解散し、閉会とする。



〔昆虫教室〕

7月29日(講師:横倉山自然の森博物館館長・高橋厚彦, 参加者数:小人18、大人10)

初めに、当博物館で開催中の「世界の昆虫展」を見学、昆虫が生きていくために自然に身につけた、不思議で素晴らしい知恵や高知県内で絶滅した蝶・トンボなどについて学習した後、隣町の佐川町の梨園にカブトムシの観察・採集に行く。

梨園のナシの木の根元に暮らすために培養中の腐葉土の中に棲むカブトムシを観察・採集するのが目的であったが、猛暑のせいで、すでに成虫となって飛んで行ってしまった後で、残念ながら幼虫しか見ることができなかった。幼虫は大きいもので太さが大人の親指大、長さは7センチほどもあり、みんなたくさん採集することができた。採集後、カブトムシの幼虫のオス・メスの見分け方、そして、幼虫の飼育の仕方を教わり、お土産に全員がカブトムシのオス・メスの成虫をもらって閉会した。

(協力):伊藤みどり氏(佐川町瑞応「伊藤果樹園」)



〔植物教室〕

8月5日(講師:横倉山自然の森博物館副館長・高橋厚彦, 参加者数:小人5人、大人4人)

まず、博物館周辺で見られる植物について学習した後、車で横倉山の第2駐車場に向かい、その周辺の植物を観察する。

ここでは、マツカゼソウやヒヨドリバナ・キンミズヒキ・ミズヒキ・サンショウソウ・ヤマノイモなどがたくさん見られ、特に白い可憐な花を密に付けるヤマノイモの花の素晴らしいさを再認識させられる。

駐車場から杉原神社の表参道石段を登り境内に入る。杉の大木の原生林で、昼間でも薄暗くうっそうとしている。

最初に視界に飛び込んでくるのが、白色の5弁の花びらを付けたギンバイソウの群落である。数百株ものギンバイソウの間花している様は、まったく壮観である。

境内を抜けると、山道沿いにモミジガサやクサヤツテ・ヤマアジサイなどが咲き乱れ、私達を快く道案内してくれる。シダ類も種類が多く、特にシラガシダやイノデ・ヤブソテツ・ジュウモンジシダ・クマワラビ・ベニシダなどがよく見られる。

この日横倉山で見られた植物は、花を付けた草本類は約50種、シダ類は約20種に及ぶ。

最後に、植物標本の作り方を簡単に学習して閉会にする。



**夏休み特別企画展：
「世界の昆虫—その美しさと不思議—」**

(7月29日～9月2日)

横倉山に棲む昆虫を始め、日本国内や世界各地の美しい昆虫や珍しい昆虫の標本、約500点を展示。

天敵から身を守るために長い年月をかけて身に付けた昆虫たちの“知恵”や身の回りの環境に次第に適応していった体の変化(地域変異)、そして、人間のくらしとの関わりなどを紹介し、併せて、すでに絶滅してしまった種とその原因についても考えてみた。

また、蝶の翅の顔料を顕微鏡で観察するコーナーも設け、知られざる昆虫の細かな体のしくみについても知ることができるよう試みた。

一方、会場内では、ヘルクレスオオカブト・コーカサスオオカブト・オオクワガタなどの8種類の生きた昆虫の成虫を飼育展示し、その生態を観察できるようにした。係員からカブトムシやクワガタムシを直接手に持たしてもらった子どもたちはその迫力に大喜びで説明に関き入っていた。

企画展：「土佐のサンゴ—その造形美と匠—」

(9月23日～10月21日)

高知県は、日本最古の4億年前のシルル紀の造礁サンゴやナウマン博士が命名し世界で紹介したジュラ紀の鳥ノ巣石灰岩中の造礁サンゴ、そして、土佐を代表するペルム紀の“古代サンゴ”など、日本列島における代表的な地質時



代の化石サンゴを産する。また、足摺宇和海国立公園で代表される美しい現生の造礁サンゴ群集も見られる。さらに、古く江戸時代から続く土佐沖のサンゴ(“土佐サンゴ”)の採集・加工が盛んで、その加工技術は日本でもトップクラスにあり、その繊細さは世界から高い評価を受けている。

今回、これら化石サンゴから現世サンゴ及びその加工品を一帯に展示し、高知県のサンゴの豊富さを広く知ってもらおうと同時に、サンゴという生き物そのものが造り出した自然の造形美と、現世サンゴ自体の色調の美しさとそれを生かした匠の織り成す装飾美の両側面を鑑賞し、土佐のサンゴのすばらしさを認識してもらおうとした。

併せて、地球温暖化の防止に関連して、造礁サンゴの果たしてきた役割・存在意義についても考えてもらった。

【石影展】(9月23日～10月21日)

石の彫刻家・庄野宏宣氏による「石彫小品展—再会—」が、仁淀川を望む博物館3F展望ロビーとテラスにおいて「土佐のサンゴ展」と同時開催された。作品の素材は清流・仁淀川下流に転がるさまざまな種類・形の石で、自然のもつ形のおもしろさをうまく利用し、それにノミで手を加えて作品と化したもの。さまざまな動物やヒトの顔・体など、無機物である石に“命”を吹き込んだ暖かみのある作品約70点が、テーマのとおり上流の生まれ故郷に作品となって帰る「再会」を果たした。

**こうちフィールドミュージアム協会・
第2回「ネイチャーサロン」** (平成14年2月2日)

「こうちフィールドミュージアム」とは、高知県内のさまざまなフィールドや社会教育施設をネットワーク化することによって県全体を一つのミュージアムとして活用し、環境学習や自然体験に対応・役立てようとするもので、2001年7月に民間非営利団体(NPO)として発足。今回その第2回目の集会在、当博物館を会場に開催された。参加者：約50名。

午前中に予定されていた横倉山散策は雨天のため中止となり、館内で学習する。午後からは講演：「横倉山に生息する蝶類」と、会員らが持ち寄った展示品についての発表・情報交換、フリーディスカッションが行われた。横倉山の昆虫・野鳥・化石・植物、仁淀川水系のオオサンショウウオの重成体・水生昆虫、さらには、独自で開発した野生動物の生態写真自動撮影法などさまざまな事象に関する研究成果が発表された。また、今回は地元越知小学校の児童と



先生による「総合学習」の事前学習の研究発表もあった。最後に、協会会長からの「県内の多くのナチュラリストが恩恵を獲った横倉山には今なお自然が比較的好く残っている。この自然豊かな横倉山を徹底的に研究する拠点が横倉山自然の森博物館であって欲しい。」の挨拶をもって閉会とする。

『横倉山フォトコンテスト』審査結果発表

博物館では、「横倉山ーその素顔と自然の営みー」をテーマに、自然豊かな横倉山のさまざまな姿やそこに生息、自生するいろんな動物や植物、史跡などを対象とした写真を募集(平成14年1月31日締切り)してきましたが、この度その審査(審査委員長:岩崎勇・高知県写真家協会会長)を終え結果が出ましたので発表致します。〔敬称略〕

- ・金賞 浦原隆夫(佐川町)……「共存」
- ・銀賞 秋沢秀昭(佐川町)……「森の精」「鎮守の森」「参道」(セット)
- ・銅賞 宮村理生(高知市)……「課外授業」
- ・審査員特別賞 井上巧(土佐市)……「古道」
上杉欣弘(高知市)……「幽寂の神域」
「移も神さびて」(セット)

応募作品は合計51点で、シャッターチャンスとうまく生かし、カメラアングルを駆使したいろんな隠された横倉山



金賞:「共存」浦原隆夫

の姿を題材にした写真が多く、参加者の努力や熱意が感じ取れ、内容的には大変充実したものとなりました。応募頂いた写真は、博物館での「横倉山写真展」(3月21日～4月14日)で展示公開し、一部は今年秋の「よさこい高知国体」の「スポーツ芸術」でも紹介させて頂きたいと思えます。ご応募どうも有難うございました。

●博物館友の会「フォレストクラブ」の平成13年度の活動

- 4月29日(日) 横倉山ツツジ観察会(雨天のため中止)
- 10月7日(日) 「横倉山フォトコンテスト」写真撮影会
- 10月27日(土)、28日(日) 広島県芸北町研修旅行・「紅

業の臥龍山と三段峽を訪ねて」

- 11月23日(金・祝日) 大樽の滝・植樹会
(※越知町内にある全国名瀑百選の一つ)
- 12月16日(日) 2001年クリスマス・リース教室

【平成14年度博物館行事予定】

- 3月21日(木・祝日)～4月14日(日) 横倉山写真展
- 4月14日(日) 横倉山ツツジ観察会
- 7月20日(土)～9月1日(日) 「世界の昆虫展」
- 7月20日(土) 夏休み博物館教室(昆虫)

- 8月4日(日) 夏休み博物館教室(植物)
- 8月18日(日) 夏休み博物館教室(化石)
- 9月21日(土)～11月4日(月・休日)
よさこい高知国体・「スポーツ芸術」:「土佐の生きものたちー滅びゆく野生動物ー」

スタッフの声、声、声

(片岡) 昨年11月のしし座流星群を見ましたか。素晴らしかったですね。私も写真に取りましたが、本館運営協議会委員の川添晃先生が写真集を出版されました。博物館でも販売しています。感動の思い出に1冊いかがですか。

(高橋) 6月下旬、横倉山の山小屋で、夜はヒメボタルの乱舞する様に、早朝には、アカショウビンやサンコウチョウの美しいさえずりにすばらしい感動を覚えたことでした。

(安井) 横倉山の三角点の眺望所や“馬鹿試し”(安徳天皇陵墓参考地南の岩場)からは、遥か北方に同じ修験道の霊場である西日本最高峰・石鎚山をかすかに望むことができる。冬の快晴の日には、青空に浮かぶ雪を頂いた山頂とその周辺の雪山が一際美しい。

(小田) 横倉山自然の森博物館の目玉(?)の一つである建築。時々、世界の安藤忠雄の作品を目当てに来られるお客さんがいます。お疲れの方はぜひご来館下さい。ここには「癒し

の空間”があります。

(浜渦) 11月半ばのある早朝、2時に目覚しをセットしていたのに、目覚めるとすでに4時。母をたたき起こして急いで庭に出て空を見上げると、それはまるでシャワーを浴びているかのようでした。100年に一度あるかないかの流星雨「しし座流星群」に心奪われたひとときでした。

(保木) 寒い日が続きますが、横倉山では自然の暖かさでいっぱいです。見渡せば緑、そして、博物館3階には越知町が一望できるテラス。とてもすばらしい博物館です。

(黒原) 博物館に勤め出して、プライベートだけでなく仕事の面でも「自然」に囲まれることになりました。私にとって横倉山の景色は当たり前ものとなっていました。さらにここで新しい自然の形を少しずつ知っていったらと思います。

高知県越知町立

横倉山
自然の森博物館

THE YOKOJAYAMA
NATURAL FOREST
MUSEUM ON

〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL.0889(26)1060 FAX.0889(26)0620

- 開館時間:午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
 - 休館日:毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
12月29日から翌年の1月3日まで
 - 入館料:大人……………500円 (半若20名以上
上の団体は
400円 100円引き)
 - 越知への交通
- | | | | | |
|----|------------|----|-----------|----|
| 高知 | バス乗車 約30分 | 佐川 | バス乗車 約15分 | 越知 |
| 高知 | バス乗車 約50分 | | | 越知 |
| 高知 | バス乗車 約100分 | | | 越知 |
| 松山 | バス乗車 約110分 | | | 越知 |

